

会報

第19号

編集・発行人 支部長 大橋 毅 彦

変わるなこハヤシ、しななかなハヤシ

日高 佳紀

二〇一三年、日本近代文学会は若手研究者ワークショップ（春季大会）および国際研究集会（一二月例会）の二つの新たな試みを行った。博士学位の取得が研究者養成のプログラムに位置づけられて久しく、また、人文学研究

を学際的領域や国際水準のなかで価値づけることが当たり前のようになりつつある状況のなかで、いずれも、この学会が、いかなる位置から組織としての役割を果たすかという問題から打ち出された新機軸にほかならない。

そして、先の秋季全国大会において、大会運営と企画の一部に関西支部が参画し、支部大会と「合同開催」として開催したことも、もう一つの大きな転換であった。この試みは、地方支部と学会本部との新たな組織的連携の可能性を模索していくことの始まりとなる

ものである。今後、支部活動はローカルな研究としてあるだけでなく、全国的な、さらにはよりグローバルな展開と地続きであることを自覚して行うことになるだろう。

学会の重要な使命の一つが、研究の再生産にあることはいままでもない。組織として研究の質を高い水準で維持するためには、その集団らしさを保ち続けると同時に、変化し続ける状況に対応し得るしなやかさを持ち合わせなくてはならないはずだ。「文学」を取り巻く様々な価値転換のなかで、今、関西支部という研究の「場」は、確実に次のステージに進もうとしている。ここで研究に携わる一人一人がこのことを実感し、自らの表現の「場」と捉え関わっていただければ幸いである。

支部大会案内

二〇一四年度

春季大会

於・奈良大学

六月七日(土)

午後一時より

連続企画

文学研究における〈作家／作者〉とは何か

— 第三回 —

小特集「サブカルチャーと

〈作家／作者〉

「プログラム」

開会の辞

奈良大学文学部長

真田 信治

演出スタイルから—

— 『まどか☆マギカ』における

「趣旨」

日本近代文学会関西支部では〈作家

自由発表

空転する「デカデンツ」

— 昭和二〇—二一年

「デカダン論争」の問題圏—

福岡 弘彬

ホラー作家—

— 「実話怪談」系文庫の変遷と

らえてみたい。

初期日本SFにおける「核」の表象

— 一九六〇年代半ば〜七〇年代初頭の

ショート・ショート作品を中心に—

森下 達

〈笑い〉の変容—

小特集「サブカルチャーと

〈作家／作者〉」

質疑応答

山田 夏樹

趣旨説明

司会 小川 直美
信時 哲郎

総会

支部長 大橋 毅彦

アニメ化・ゲーム化、読者による二次

創作などの広がり視野に入れれば、
〈作家／作者〉のイメージはきわめて
複雑になってくる。

たとえば、近年、マンガ家を描いた
マンガやエッセイマンガなどが好評を
得ているが、小説家小説（≡私小説）
の流行と並べてみると、近代小説と通
底するものが見えてくるかもしれない。
一方、サブカルチャーにおける共同制
作や分業、メディアミックスなどの視
点と、近代文学研究とを突き合わせた
とき、われわれが持ちえた従来の問題
意識以外にも、近代小説の新しい相貌
が立ち上がってくる。編集者の存在、
あるいは映画化・テレビドラマ化など
が〈作家／作者〉におよぼした影響に
ついて、きちんと考察されてきたとは
言い切れないのが現状ではないだろう
か。

今回の小特集では、サブカルチャー

における〈作家／作者〉について問い
直す試みを行い、あわせてサブカルチ
ャーでは自明視されてきたが近代文学
研究では未だ十分に検討されてこなか
った問題についても考えたい。対象は
多岐に渡るであろう。様々な視点から
の切り口をもとに、刺激的な意見交換
の場となることを期待する。

〔発表要旨〕

TVアニメにおける監督の位置

—『まどか☆マギカ』における

演出スタイルから—

禰美 智章

多数のスタッフの手によって制作さ
れるアニメーションにおいて、〈作家
／作者〉あるいは「作家性」の問題は

どのように捉えられるべきだろうか。

例えば、作品全体を統括する役割を担
うのが監督であるが、細分化された制
作過程のなかで監督が各制作パートの
どこまで関わっているのかが不明瞭で
あるという問題が存在する。特に、限
られた予算と時間のなかで毎週三〇分
の作品を制作しなければならぬTV
アニメの場合、ストーリーに関しては、
監督の他に何名もの脚本家やストーリ
ーを統括するシリーズ構成が加わる制
作体制、演出に関しても、監督の指示
のもと、各話ごとに異なる演出家が担
当する制作体制が一般的となっている。
本発表では、主に二〇一一年に放映
された、虚淵玄脚本・新房昭之監督の
アニメ『魔法少女まどか☆マギカ』を
取り上げ、その演出のあり方に着目す
る。本作は、脚本家の虚淵氏が全ての
シナリオを担当しているが、インタビ

ユー等でシナリオがキャラクター等の設定に先行して執筆された上で、制作がなされたことが明らかにされている。

発表では、同じシナリオを小説化、マンガ化したノベライズ版、コミック版との比較を補助線に、シナリオと映像の比較分析を行う。虚淵氏による脚本を監督である新房氏がいかに映像化しているのか、そのイメージの展開を考察することを通して、TVアニメにおける監督の位置を明らかにし、TVアニメにおける「作家／作者」の問題を検討する。

「記号としての作者」は

死につつあるか？

—「実話怪談」系文庫の変遷と

ホラー作家—

奈良崎 英穂

ここで用いている「記号としての作者」というのは、例えばこの作家の新作が出たらストーリーもなにも知らなくとも無条件に買う、といった意味合いで作用している換喩的な「記号」である。現在一部で支持を得る「実話怪談」系文庫というジャンルは、こうした「記号としての作者」が介在しづらいジャンルなのではないか？

「実話怪談」系文庫は九〇年代半ば以降、急速に発行点数を伸ばし、一ジャンルを築いた感があるが、それは古い記号性に頼った「中岡俊哉」的なものを否定することによってもたらされたのではなかったか。九三年以降「実話怪談」系文庫は『超』怖い話』シリーズと稲川淳二を軸に回り始めた。いわば、「中岡俊哉」という記号によって喚起される古き怪談は見捨てられ、無名

の一般人Ⅱ「記号性を持たない作者」という新たな記号による実話怪談が見されたのである。

角川ホラー文庫というレーベルは、「記号としての作者」を一方に置き、もう一方に新たに発掘した新人を配して、約二十年に渡りホラー小説界をリードし続けてきた。ここでは新たな「記号としての作者」を生み出しましたが、また多数の新人を見捨ててきました。それはおそらく新たなビジネススタイルだったのだろう。取り敢えず多数の新人を発掘するというスタイルは、その後「実話怪談」系文庫にも及び、そこでは作者という記号性が剥奪され、「無名性」が作者に代わる記号として作用する状況を生みだしている。

「分身」としての主人公

—さくらももこ作品における

〈笑い〉の変容—

山田 夏樹

さくらももこ「ちびまる子ちゃん」
〔りぼん〕一九八六・八・九六・六。

以後不定期掲載）は、一九七四年の静岡県清水市を舞台とする「エッセイ・コミック」として描かれていた。しかしその後、揺れはありながらも、徐々に作者「さくらももこ」と主人公「まる子」は解離し、ノスタルジーを喚起するものではなく、多くの登場人物が戯れる様相を描き出す側面の強い作品に変容していくこととなる。

九〇年代初頭にブームとなった当時から、実際にはそのようなポストモダン性は指摘されてもいたのであるが、一方で、「まる子」が自身の「分身」「一部」になっていったことも作者によつ

て主張されていく。つまり、登場人物として対象化していく過程と、自身と一体化するように認識していく過程が並行して行われる。そして、そうした一見相反する構図において、本作は単に「エッセイ・コミック」から離れるだけでなく、〈笑い〉の性質も大きく変容させることとなつていく。

今回、そうした仕組みに注目することにより、作品内に登場する作者、または主人公の機能について改めて考察していきたい。少女マンガという表現形態や、ベストセラーとなつた『もものかんづめ』（集英社、一九九一・三）から現在に至るまで描き続けられている一連のエッセイ、また同時代の〈笑い〉などの関わりについても言及する。

自由発表〔発表要旨〕

空転する「デカデンツ」

—昭和一〇—一一年

「デカダン論争」の問題圏—

福岡 弘彬

昭和一〇年一〇月、保田与重郎は「日本浪漫派」に「主題の積極性について（又は文学の曖昧さ）」を発表する。

保田はこの晦渋な芸術論において、自分たちこそがポスト・マルクス主義を担う者であることを、「デカデンツ」の語を用いて表明した。この語を符牒とした一枚岩の「日本浪漫派」を偽装する保田であったが、しかし彼が「僕ら」と想定した共同体内部からも、その外部からも、「デカデンツ」は罅入れられ、壊体されてしまう。同時期文壇において〈デカダンス〉問題が喧しくなる中で、「デカデンツ」は現代の

若者の虚無的・頹廢的傾向の問題へと
転轍され、ほとんどついに理解される
ことはなかった。「ほど一年の間にデ
カダン文学といふことは、日本の現文
壇人を総動員してあらぬ方に歪められ
て了つた」(保田与重郎「文芸時評」、

「日本浪漫派」昭11・9)――。

保田与重郎自身「デカダン論争」と
呼ぶ右のような事態を復元することが、
本発表の狙いである。「主題の積極性
について(又は文学の曖昧さ)」を焦
点に、保田が「デカデンツ」に込めた
意味と戦略を明らかにした上で、「論
争」――とは到底呼べぬものであるが
――の推移を整理することで、その語
の概念化・伝達の失敗を辿る。文壇を
空転する「デカデンツ」の軌跡を追い
ながら、しかし確かにそこに生じてい
た(デカダナス)の新たな可能性を考
察したい。

初期日本SFにおける

「核」の表象

――一九六〇年代半ばより七〇年代
初頭のシヨート・シヨート作品
を中心に――

森下 達

本発表では、一九六〇年代半ばから
七〇年代にかけて、ジャンルのな成立
を果たした後の日本SFに対して、シ
ヨート・シヨートを中心に検討を加え
る。問題になるのは、以下の二点であ
る。ひとつ目は、シヨート・シヨート
作品において、核戦争による破壊や放
射線被曝による奇形化などのモチーフ
が、わかりやすい「オチ」としてしば
しば用いられたこと。ふたつ目は、同
時代における原子力発電事業の拡大を
背景に、電力会社のPR誌や、日本原
子力文化振興財団の発行する『原子力
文化』に発表された諸作品において特
に、完全な電化がなされた未来社会が

作品の舞台として描かれたことである。
結果、被爆/被曝に対する恐怖感が、
現実の国際情勢から切り離され、切実
さを失っていった一方で、一九四〇～
五〇年代に夢想されていた原子力によ
る理想社会というヴィジョンは、単な
る未来の日常として、政治問題化され
ない形でより広く受け入れられるよう
になっていった。

星新一に代表されるSF作家は、シ
ヨート・シヨートにおいて顕著だが、
あざやかな視点の転換による価値の相
対化をその中心的な方法論としてきた。
初期の日本SFにおける「核」表象を
論じることは、SF的な相対化の方法
論が、社会的なテーマにいかに関わり
得るのか、あるいは、関わることで得
きないのかを考える上での手がかりを
与えてくれるだろう。エッセイなども
組上に載せることで、SF作家たちが
掘って立つSF観、科学観を問い直し、
問題に答えたい。

大会報告

二〇一三年度 秋季大会（全国大会合同開催）

一〇月二六日・二七日 於・関西大学

〔自由発表・パネル〕（登壇者から）

発表を終えて

福岡 弘彬

多くの方から沢山のご教示を賜わり、発表は自らの考えを更新する貴重な機会となった。この場を借りて、改めて感謝申し上げます。ここでは、幾つかのご意見・ご質問に対して、現在の考えや今後の展望を述べることで、感想に代えさせていただきたい。

①女を「所有」し、食器と「一緒にゐる」とされる、作品の語彙体系に関するご質問について。また、②ジェンダー・セクシュアリティ的観点から

の考察がなければ、この作品は読解できないのではないか、というご意見について。双方に対して、未だ十分なお答えが用意できていない。同時期「戦争と一人の女」〔『サロン』昭21・11〕など、傑出した女性語り作品を安吾が記したことを勘案すれば、「いづこへ」に描出されるミソジニーは、テクストの戦略的な装いとして捉えられる。以降の課題としたい。

続いて③〈戦争責任〉問題を安吾から考えるならば、天皇についての考察が不可欠ではないか、というご意見について。丸山眞男〈無責任の体系〉批判と重ねて、この問題を考察することは現在なお火急の課題であると思われる

るが、今回の発表で私が考察しようとした問題圏——〈責任〉と〈主体〉の関係性について・〈戦争責任〉とは何かを問う手続きについて・〈自己責任〉の虚偽性について——とは、径庭があるように思う。これらの点とやかに接続し得るか、もう少しじっくりと考えたい。

最後に④安吾の小説を安吾の評論によつて意義付けても仕方がなく、例えば今日的な見地から小説単体を考察することが必要なのではないか、というご意見について。これについては、発表者の考えと対立する。今回の発表内容は、小説―評論を接続する形で浮かび上がる「賭け」の概念に、〈主体化〉力学への批評性を看取するものであった。さらにこの発表は、〈自己責任〉の名の下に〈主体〉が編成され続け、それを引き受けていないと認められた

固有名が、言説空間から排除され続けている今日において、大きな意義を持つ——安吾の作家神話再編という陥穽を差し引いても——という、発表者の信念に基づく。目下論文での発表を画策しているため、改めてご批正を仰ぎたく思う。

「昇曙夢」のシンボを終えて

和田 芳英

ロシア文学者昇曙夢（一八七八～一九五八）の偉大な業績を正當に評価し位置づけることは私の宿願である。

昇曙夢は20世紀初頭のロシア文壇に開花した所謂「ロシアモダニズム」派に属する作家の珠玉の短篇を翻訳した。ロシア第一次革命後の反動的な圧政と

社会不安の息詰まるような閉塞感を象徴的、神秘的且つ写實的に描いて衝撃的な内容になっている。おりしも日本国内では自然主義文学の行き詰まりの状況や社会主義に対する厳しい弾圧があり、「大逆事件」に象徴されるように「時代閉塞の現状」（石川啄木）を呈していた。昇曙夢は翻訳集『六人集』（明43）や『毒の園』（明45）、クプリーンの『決闘・生活の河』（大元）、ザイツエフの『心の扉』（大2）等、ロシア同時代の最先端の文学を驚くほどの感度のよさで翻訳紹介。近代日本文学の転換期にあたる一九一〇年（明43）前後の新興文学を促す起爆剤となった。後年昇曙夢の還暦記念『六人集と毒の園一附文壇諸家感想録』（昭14・正教時報社）に収録された数多くの作家や文学者が鮮烈な印象を語っている。なかでも谷崎精二は曙夢の翻訳を「文学の教

科書」であったと回想している。芥川龍之介をはじめ広津和郎・宇野浩二・志賀直哉・葛西善藏・豊島与志雄・小川未明・谷崎潤一郎などの若い世代は曙夢の翻訳を驚異的に迎え耽読している。そして深甚なる影響を受けて創作の糧にし芸術家としての精神を形成している（拙著『ロシア文学者昇曙夢&芥川龍之介論考』参照）。

一方曙夢は露文学全般にわたって旺盛な研究を行い、生涯で一八七卷余の著・訳書を刊行している。殊に文豪トルストイを敬愛し「ロシアの良心」と見、二十冊余の秀れた著・訳書を出版。

杜翁晩年の隠遁出奔の経緯や死歿前後の動静を国民に広く伝えていく。明治43年11月に死去すると一ヶ月の短時間で啓蒙書『偉人トルストイ伯』（明44・春陽堂）を出版し世の耳目を集めた。大正時代を迎えるとトルストイ流

の人道主義・博愛思想が流行した。武者小路実篤は明治末から大正初期の時代を捉えて「昇曙夢の時代」と讃え回顧している。岩城準太郎は名著『明治文学史』（昭2）のなかで昇曙夢、瀬沼夏葉等新進の露国文学者が輩出して「わが国の文学に影響して、詩歌、小説、戯曲、あらゆる方面にめざましい変化を起こしている。これは著しい現象である。」と記している。

今回平成25年度、日本近代文学会秋季大会において昇曙夢に関するシンポジウムを開催することができた。比較文学会会員でもある加藤百合（筑波大・ロシア文学）・源貴志（早大・ロシア文学）・大東和重（関学大・中国文学）・宮越勉（明大・志賀直哉研究）四氏の協力を得てそれぞれの専門分野の観点から「昇曙夢」の功績を多角的に検証できたことは大変意義のある催し

であったと思う。心からお礼申しあげます。

「自由発表・パネル」（フロアから）

印象記

（福岡弘彬氏

「いづこへ」、無責任な安吾）

金岡 直子

本大会、関西勢のトップを切った福岡氏は、これまで「伝記的」に語られてきた「いづこへ」を安吾の政治的関心の契機として取り挙げた。

福岡氏はまず、作品世界（昭和九、十年頃）と、発表時期の昭和二十一年、つまり戦後になって意味を増す文学者の「告白」に焦点を当てる試みを行う。

そのため戦争責任のなかで要請された告白という主体についての丁寧な整理からの説明がなされたのだが、今回の発表に關していえば「文学時標」から発端とするのは、いささか迂遠と感じられた。高見順の戦争責任追及にたいする応答と、外部（戦争）の原因を自責とする点を認めた文学者からの逆説として、「私事」の「告白」で「自己を発見」し、戦争責任とは違う立場をとった安吾を据えたならば、その論点をよりクリアにしてもらえると良かったのではないかと思われた。

続いて行われた本文の読解では、饒舌に語る「私」と「私」によって語られる理想の「私」のズレや、時系列の揺れから、女の所有と干渉によって生活感を帯びてしまう「私」に言及。こうした断絶・複数化する「私」について、発表の深度は増していった。「私」

が本能的に嫌悪するものに囲まれるようになり、魅力を感じていた女や「持たない」生活から隔絶されていくさまを読み、これまでの二項対立から離れて、文学によって獲得すべき「空虚な主体」の意味を探索する過程はとても丁寧であつた。

ただし一番聴衆の興味を惹き、発表者も自身の論考に血を宿しうと思へたのは、最後に提示された安吾の「賭け」の部分ではなかつたか。「賭け」に負け続け、自我の発見に繋がらない点には、個人的にはたとえばクルンボルトの「計画された偶然性」のような瞬間を掴み切れないでいる「私」の本能の鈍化を感じる。「賭け」について今後の展開に強く興味を持つ。さらにいえば、構成上この論旨を中心に置くことができれば、本発表の印象もより鮮やかであつたと思われた。

印象記

(山本歩氏)

「田山花袋『小説作法』

における「作法」

須田 千里

山本歩氏は、田山花袋『小説作法』(明治四二年。「通俗作文全書」第二四編)を取り上げ、本書が、小説を書きたがる初学者に向けて、感覚や経験を基礎としたたゆみない修練により「型」を打ち破る以外に道はない、との形式蔑視の主張を行ったと指摘。多元的であるべき小説創作に対して、花袋自身やモーパッサンを一つの手本とすること、後の小説作法書を方向づけた、とした。即効性のあるテクニクを要求する初学者に対し、花袋はそれを否定し、モーパッサンの「序『小説』」に見

られる、「才能とは長い忍耐にすぎない」との言葉を踏まえ、すべての規定を棄てて赤裸々に自然の前に立つことを主張する。同時に花袋は、インスピレーションも否定し、事実・経験を重視せよと初学者に警告を与え、特権的で強硬な態度によって、逆に青年達を誘惑した、と結論づけた。なお、別紙参考資料として、『小説作法』目次および初出・改稿状況や、内容の要約および分析、「通俗作文全書」全二四編の内容一覧が添えられている。他の小説作法書や、『文章世界』との関連など、周辺資料も周到に目配りされており、論旨もわかりやすく説得的であつた。

私としては、発表それ自体よりも、花袋のいう「修練」の内実がどのようなものか、知りたかつた。つまり、花袋の立場は素朴な自然主義であり、型やインスピレーションの否定もその路

線上にあるのだが、一般論はともかくとして、では実際、花袋自身がそれらを乗り越えているのかどうか。「修練」と一口に言っても、その具体例やせめて方向付けがないと、初学者は困るのではないか。

質疑では、型を離れよと言っている花袋が、同時に「通俗作文全書」シリーズで『美文作法』も著していることの意味が問われたが、実際、型にはまった美文と、型から自由な小説とは、花袋の中でどう区分されているのだろうか。また、本書に従って小説を書くとした人はいるのか、との質問に対して、言及例ではあるが、加藤武雄や中村武羅夫の名が挙げられた。本書に一定の影響力があつたわけだが、彼等への影響をフォローしていけば、花袋との相違も出て来るかも知れない。それはまた興味深い実例となるだろう。

広がりを感じさせる面白いテーマと思う。

印象記

(権藤愛順氏)

「木下李太郎と夏目漱石

—『唐草表紙』における

夏目漱石序文の意味—」

天野 知幸

権藤愛順氏による木下李太郎『唐草表紙』(大正四年)の夏目漱石序文に関する発表は、李太郎と漱石の表現上の接点を明らかにするとともに、漱石が見落とした『唐草表紙』の特徴を論じるものだった。漱石が「情調」「ムード」という言葉に繰り返し言及していることを序文の特徴として捉え、それがド

イツ語の「Stimmung」(英語 mood)の訳語である「情調」を李太郎が意識的に表現したことに對する評価であること、また、その背景に、朦朧、漠然とした「Stimmung」への関心や感情移入美学を取り込んだ象徴的表現への関心が同時代的に広がっていたことを指摘。「硝子問屋」、「山の焼けたる日の夕方」における感覚描写中心の表現や、景の描写が心象の喩えにもなっているような主客融合的な表現が、漱石が当時関心を持っていた「感じ」の表現と関連するものであることも踏まえた上で、李太郎と漱石がともに象徴的表現、深層の表現に価値を見出していたことを論じた。また、漱石が見落とした側面として、「無意識」の領域に存在する幼年期の性的心理を象徴的に表現しようとする特徴が『唐草表紙』にあることも指摘。幼少期から青年期に至る「感

覚史」「性欲史」を辿るといふ意図が作品集全体において見られるとの結論が導き出された。

漱石の序文の理解を起点として、「情調」への関心の高まりのなかで李太郎の『唐草表紙』を位置づける試みであったが、丁寧な資料分析が踏まえられており、理解がしやすかった。また、漱石の序文では言及されない側面を見出そうとした発表後半も、抱月や白秋をはじめとする他の作家の関心のありかたとの違いに関する指摘や、具体的な表現の分析は興味深く、説得力があった。ただそのぶん、象徴主義への関心の広がっていた明治末から大正初期という時代背景において、『唐草表紙』の表現がいかに評価、理解されたのかという点について言及があればとも感じた。漱石の序文ばかりに関心が寄せられる研究状況に対して、『唐草表紙』

そのものの議論が深められるべきという意見が会場から出たが、作品集全体を視野に入れ、そこに「感覚史」や「性欲史」を見出そうとする考察は、そうした方向性を持つものであったように思う。表現史を考える上で今後広がり期待できる研究テーマとの印象を持った。

印象記

（増田周子氏）

「火野葦平『広東進軍抄』論

―フィクションとしての

戦争文学―）

木田 隆文

日本近代文学会秋季大会（二日目）
第四会場では、大川内夏樹氏、増田周

子氏、大木志門氏、そして上戸理恵氏による報告が行われた。いずれも丹念な資料調査と広い視野を持った聴きこたえある報告であったが、全体の印象は本部「会報」にも紹介されるため、ここでは特に支部会員である増田周子氏「火野葦平『広東進軍抄』論―フィクションとしての戦争文学―」に絞って印象を述べてみたいと思う。

増田氏の報告は、火野葦平『広東進軍抄』と彼の「従軍手帳」を比較し、そのうえで一般に「記録文学」とされる本作の「フィクション」性を検討するものであった。この「従軍手帳」は、近年増田氏によって翻刻がすすめられているが、今回の報告でもまずは手帳と作品との比較が丹念に行われ、自然描写や兵隊の行動・心理、さらには捕虜の人間性に加筆が行われたこと、その逆に軍事機密については削除されて

いたことなどが明らかにされ、火野の創作的手法を考える重要な手がかりを提示して余りあるものであった。

だがその丹念さゆえであろう。二つ目の検討課題として予告されていた『広東進軍抄』のメディア化の問題が駆け足になってしまったのは残念であった。質疑においても問われていたように、フィクションを含むはずのこの作品を、あくまで〈記録〉として受容しようとした国民たちはいかなるコードを有していたのか、メディア化の問題はそれを検討するうえで重要だと思われるからである。質疑では他にも、火野にとつて〈記録〉とはどのような考えられていたのか、はたしてこうした作品は「記録文学」という言葉で括ることができるのか、といった問題提起など、〈フィクション／記録〉をめぐる問題に話題が集中していた。これら

質疑の投げかけた問題意識と、氏の丁寧な基礎調査が重なりあう先には、『広東進軍抄』一作品の問題だけにとどまらない、戦時下の〈記録文学〉そのものを問い直す論考が期待されるのではないかと感じた。

印象記

(和田芳英氏)

「昇曙夢について」

信時 哲郎

第一会場では、ロシア文学の翻訳家・昇曙夢（明治十一〜昭和三十三）についてのパネル発表が行われた。パネル代表は『ロシア文学者昇曙夢&芥川龍之介論考』（平成十三）等をはじめとした曙夢に関する研究で知られる和

田芳英氏。最初に壇に上った氏は、ロシア文学の翻訳者として二葉亭四迷についてにはよく語られるものの、その次の世代にあたる曙夢については、多くの作家たちに読まれ、影響を与えながらも、ほとんど注目されていないのはなぜなのかと疑問を呈し、パネルが始まった。

次に壇に上ったのは、『明治期露西亜文学翻訳論攷』（平成二十四）の著書がある加藤百合氏。氏は、大正時代の作家たちに愛読された曙夢の翻訳集『六人集』（明治四十三）や『毒の園』（明治四十五）に収められた作品は、ロシアで発表されて間もなくの新しいもので、当時の日本ではほとんど知られていない若い作家のものばかりであることを指摘。曙夢は自分の目で同時代のロシアを見ていこうという姿勢が顕著で、既に大作家との定評がある作家の

作品を、英訳や独訳から重訳していた
のとは違っているのだとした。

全七巻におよぶ『晧夢翻訳・著作
選集』（平成二十三）を共同編集した源
貴志氏は、晧夢の仕事を再検討する試
みが近年増していることから、忘れ
られた人だとは言えないだろうとし、
むしろ晧夢を全体的に考える試み、つ
まり奄美大島からロシア正教の信者と
して上京し、陸軍で教育にあたり、ロ
シア革命を眺めるという矛盾を抱え込
んだ彼について、トータルに把握する
試みの必要性について語った。

志賀直哉の研究者・宮越勉氏は、外
国文学と志賀の関係を述べ、ロシア文
学もよく読んでいたとし、晧夢の訳業
にも触れていたと言う。が、氏は志賀
のツルゲーネフ、トルストイ、ドスト
エフスキ、チェーホフらに関する言
及や影響についてコメントを加えた後、

志賀が晧夢の名前をあげたのは一度き
りで、晧夢の訳した作品と関連しそ
うなのは『六人集』所収のアンドレー
フ「霧」くらいではないか、とした。

最後の登壇者は日中比較文学者の大
東和重氏。中国におけるロシア文学の
受容には、ヨーロッパ諸語を介するル
ートの他に日本経由のルートもあつた
ことを指摘。この際に晧夢の果した役
割は大きく、例えば魯迅の弟・周作人
は、二葉亭の訳文は芸術的だが原文に
忠実ではなく、役に立ったのは晧夢の
ものであつたと述べていることを紹介
した。また、革命後のソビエト文学受
容においても晧夢の果した役割は大き
かったという。

晧夢の仕事について詳しくないまま
に臨んだが、晧夢が大家を追いかけて
いくタイプでなく、同時代の先端的
な動きについて紹介することを重視す

る人物であつたこと、また、おそらく
そうしたこともあって、多くの人に読
まれながらも、晧夢自身の文学観が窺
いにくくなっているのだということを知
った。今後は、源氏の述べたように、
翻訳家としてだけでなく、激動の時代
のロシアを扱った知識人として、奄美
大島出身の文学者として全的に捉える
必要性、そして大東氏の述べたように
日本以外での受容や影響について考え
ていく必要性を感じた。

〔関西支部特別企画〕(パネリストから)

「テキスト」をめぐる葛藤

内藤 由直

研究の世界に足を踏み入れた頃には、必ず「テキスト」と書かなければならない、「作品」と書いてはいけないうという強迫観念に苛まれていたものだが、いつの間にかそうした意識が薄れていった。「作者」について言及するのであれば「作品」で良いではないか、わざわざ外来語を使う必要もなく「本文」で良いではないかと考えるようになった。けれども、歴史的な蓄積の上に現在の研究がある以上、「テキスト」概念を無かったことにはできない。では、「テキスト」という言葉をどう処理すれば良いのか。発表では、

「テキスト」を改めて原点から見直すことで、「テキスト」をめぐる自身の葛藤に結着をつけようと考えた。

発表で強調したように、日本近代文学研究に「テキスト」という用語が導入され、作品の言葉を私的に占有する「作者」の存在が穿たれた背景には、亢進する国家イデオロギーと資本主義に対する批判意識があった。一九八〇年代の冷戦期／バブル経済全盛期に生じた「こゝろ」論争においてそうした批判がなされていたことは、何度でも振り返って驚くべきことだ。そこには、当時の情況に対する文学研究者の犀利な同時代感覚とともに、いわゆる「文学」という限定された枠組みを突破し、近代文学研究を隣接諸科学との密接な協働連関の中へ位置づけようとする実践的な契機があったはずだ。「テキスト」は、文学それ自体をも解体す

る威力を持った係争的な概念だったのである。

しかし、「テキスト」と「作品本文」の違いがよく分からなくなった現在において、「テキスト」は最早、使用期限を過ぎたジャーゴンに成り下がったように思われる。私の発表は、それでもまだ断ち切れない「テキスト」に対する未練を吐露したものに過ぎない。とは言え、目指すべきは、「テキスト」の復権でもなければテキスト論と「作者」との矛盾を揚棄することでもない。必要なのは、近代文学研究がどうすれば「現在」に関わるためのアクチュアリティを獲得できるのかという問いに對して、自分自身の言葉によって答えを創り出していくことだ。そのためには、愛憎相半ばする「テキスト」への未練を振り切つて、きっぱりとサヨナラを言うべき時が来たのかも知れない

い。

ところで大会当日には、龍谷大学から二人の教員が登壇したこともあり、龍大の学生たちが数多く発表を聞きに来てくれた。そして、私たちの議論の内容に物足りなさを覚えた有志学生たちが後日、延長戦を企画・開催してくれた。一二月に龍谷大学で行われた延長戦では、国語科教育を専門とする同僚の堀田悟史氏をディスカッサントに迎え、田口律男氏と私が再び発表を行い、集まった三〇人近い学生たちとともに長時間に亘って「作者」や「テクスト」の問題について討議した。普段、授業を受けている教員たちの間にある考え方の差異や、学校現場の実践例を検証する過程で見えてくる「作者」問題の別種の側面が鮮明になったことで、学生たちの思考がより一層深まったはずだ。学生たちの知的好奇心を刺激し、

自主的な学びの機会を提供する一助となったことが、今回の研究発表の最大の収穫であった。

テクスト論と作家論との

互恵関係はありうるか？

田口 律男

テクストはつねにすでに作家情報に包囲されている。——というのが私の（平凡な）結論のひとつだった。明治の中頃から、新潮社をはじめとする出版メディアによって、作家の伝記、年譜という制度が確立され、作家と作品とが分かちがたく結びつけられていく。一九六〇年代の作家／作品論は、その延長に君臨したディシプリンだった。そうした伝統や制度に対抗して出てき

たテクスト論が、作家／作品論とせめぎあうのは当然のことで、そのせめぎあいから何を生みだすかが私の課題だった。

テクスト論は作家情報より、言葉の手触りを大事にする（はずである）。しかし、言葉の手触りは失われやすい。たやすく意味に変換されるからだ。むしろ言葉にとつて意味が重要なことは、だれも否定しないだろう。認知言語学では、意味が言語使用者の認知や行動様式に深くかわかることを示唆している。とはいえ言葉は、意味にのみ還元されるものではない。言葉の手触りは、意味に還元されないクオリア（たとえば文字の物質性、響き、リズム、イメージなど）とも関係している。とくに詩的言語はそうだ。だが意味の磁力は強い。なかでも、その言葉を生み出した作家主体との結びつきは最強スクリ

プトだ。出版関係、教育関係もそれを望んでいる。

ところで個人学会に深入りして学んだことのひとつは、作家はもつとも肝心なことに口を噤む、あるいはウソをつくということである。(これは横光利一に限らない。「全身小説家」という強者もいるくらいである。)つまり作家情報は、どこまで辿っても限定的であり、恣意的である。むろんそれが分かるのは、徹底的に作家を追跡した場合だけだ。ならば、作家情報では結びつかないミッシングリンクを繋ぐものはなにか? 言葉の手触りを梃子に、発表ではその具体例を示したつもりだが、果たしてそれは成功したのだろうか。

そういえば、当日の発表者のボジションもおもしろかった。向かって左端の内藤さんは、テキスト論のイデオロギー的復権を説き、右端の野崎さんは

作家論のブラッシュアップを説いているように見えた。その綱引きのあいだで、小平さんは雑誌メディアが作家を捏造する仕組みをあばき、私はテキスト論と作家論との互恵関係に探りを入れた。絶妙なフォーメーションだったというべきか。後日、聴講した学生さんたちの求めに応じて、龍谷大学で延長戦が持たれたさい、内藤さんと私とのあいだで熱いバトルが繰り広げられた。その時、私は向かって左端に位置していた。私はオポチュニストではないのである。

発表を終えて

——ロラン・バルトとわれわれ

野崎 敏

「作者」のかたわらに「翻訳者」を配してみることで、作者概念に多少とも揺さぶりをかけることが可能ではないか。たとえば森鷗外である。ゲーテを始めとするドイツ文学との関係が強調されがちだが、彼が本格的に「作者」となっていた時期においては、フランス語圏の自然主義文学や世紀末文学との関係性が重要であり、なお考察の余地があるとなつね感してきた。このたびの発表では、ベルギー世紀末の作家カミーユ・ルモニエの、かなり赤裸々な描写を含む長篇『恋する男』(一八九七年)を、鷗外が「翻訳」しつつ取り込むことで「青年」一篇が成り立

ったのではないかという仮説を提出した。さらなる実証の裏づけが必要だが、ともあれ第一歩を踏み出すことができた。部外者に貴重な機会を与えてくださった皆様に心から御礼申し上げたい。

このたび強く印象づけられたのが、ロラン・バルトの演じ続けている役割の大きさである。バルトの「作者の死」が日本文学の学会でこれほど広く参照され、議論の上で当然の前提とされていることに驚かされた。それはまた、彼の仕事について改めて考え直すよい機会となった。何しろロラン・バルトはたえざる転変を旨とした多形的な批評家である。その彼がある時期に提出したテーゼを絶対視するとしたら、それはいささか非バルト的な教条主義の危険を孕みはしないか。バルト自身は「作者の死」を自らの代表作とみなしてはいなかった。一九六七年にこの文

章をイタリアの雑誌に発表したきり、書物に再録しようとしなかったのである。彼の高弟アントワーヌ・コンパニオンは、これほど学生たちが必死でコピーした論文は他になかったと回想している。いかにもマニフェスト然としたこの文書を、バルトは「公認」のものとしたがらなかった節がある。それが日本では独自編集による単行本に収められて公認の度合いが増したように思う。

もちろん、バルトのためらいを超えてこれを活用していけない理由はない。だが、バルトが自己の立場をのちに否定していることも知っておくべきだろう。『小説の準備』に収められた一九七九年度の講義ノートに彼ははつきり「作者の回帰」と記している。新批評は「作者を抑圧」（翻訳345頁）した、だが自分には作者及び伝記への関心が戻

っている。そうした動きは一般的にも見られるのではないかというのだ。そんな揺り戻しの切実さを否定することは難しい。フランス語には直訳すれば「生来の気質は追い払っても駆け足で戻ってくる」という意味の諺がある。バルトの実例を見るのに、「作者」もそうした存在なのではないかと思えてならないのだ。

〔関西支部特別企画〕（フロアから）

多様さと深まりと

奥野 久美子

連続企画第一回目の成果を継ぐ今回のテーマに、パネリストがそれぞれの立場からアプローチし、題材も視点も方法も多様で、実り多いシンポジウムとなった。特に翻訳という視点を加えたことで議論が格段に深まったように思う。

まず内藤由直氏は、八十年代の「ころ」論争の意味を問い直し、この論争が方法論の対立でなく研究者の政治性の問題に関わるものであり、資本・国家イデオロギー批判が発点であったことを確認。その目的が論争の中で見失われていったことを指摘し、原点に

帰って（作者）を考える必要性を説かれた。

続く田口律男氏は年譜という制度を歴史的経緯から説き起こし、続いてその（年譜的なもの）を相対化する試みを、横光利一を例に行なった。特に横光の三重三中時代について、年譜類からわかる像と、当時の修学旅行記の文体とのギャップを埋める手がかりとして、横光の読書歴や同時代の雑誌等を検証し、川路柳虹の訳詩の影響を立証されたことは興味深く、（作家作品論＋テクスト）が必要とまとめられた。

三人目の小平麻衣子氏は、『新女苑』とその誌上で女性投稿者たちの文章指導をしていた川端康成の指導姿勢を材に、女性の教養を高めることを目的とし（教養としての文学）を打ち出しながら、（書き手女性を作家にさせない）構造を持っていたことを指摘し、（作

家）イメージをその生成時の問題から検証された。教養についての考察をふまえた上で、ヴァリエーションや技巧など作家には必要な要素を排し、未熟、嘘がないといった素人的要素を評価する指導がなされていたことなどを分析された。

最後に仏文学者の野崎欽氏が、翻訳をめぐって、作者の問題に刺激的な一石を投じて各発表を締めくくられた。「赤と黒」の新訳でも知られる氏は、作者か読者かという問題は翻訳者を入れると様相が変わるとし、訳者の作者への同化願望、さらには訳者が作者に取って代わり、新たな作者が生成することを、鷗外の「青年」とルモニエの「恋する男」の関係を例に実証し、作者とは流動的な存在であるとされた。

フロアからは、作者という指標の向こうに何があるか、という特集の趣旨

に関わる質問のほか、個別の質疑も多く出されたが、一つ一つをここで紹介する紙幅がなく残念である。野崎氏のご発表について、翻訳という行為においては、原作者でなくテキストと向き合うのではないか、という質問に対し、〈作者〉はテキストからプログラムの立上るもの、と答えられたことが、この企画全体にとつても示唆的であった。時間も迫った最後に、野崎氏から、世界的に日本文学の研究者が増えており、これからバルトの言った読者論に加えて、作品が言語の壁を超える現象をとらえていく必要がある、ポスト作者としての訳者のあり方を日本から発信してゆける可能性が大いにある、という展望が示され、前向きにこのシンポジウムを終えることができた。この成果を次回へつなげ、さらなる展開がなされてゆくことが楽しみである。

特集という祝祭

真銅 正宏

日本近代文学会の秋季大会、いわゆる全国大会と、関西支部秋季大会との合同開催という初めての試みの中で、その合同性を体現する特集として企画されたのが、大会二日目午後の「拡張する〈作家／作者〉イメージと実証性のありか」である。従来の、東京圏以外で大会が行われる地方会場校形式と、今回の企画共同形式とが、いったいどのように異なるものなのか。その象徴となるのが、この「関西支部特別企画」の役割であったものと推察される。この特集は、いわば大会の祝祭行事であった。

さて、このような場の発表者は、自らの研究の興味と企画テーマとを、い

ったいどのようにすりあわせるものなのであろうか。私の興味は、このきらびやかな技の競演にも向かった。

内藤由直氏の「二ころ」論争における〈作者〉の問題」は、この論争が、一見、テキスト論とそれ以前の作家論的作品論との対立に図式化できるようなものであったがために、特集テーマに真摯に立ち向かい選ばれた論点と見える。ただしこの論争は単純な二項対立に還元されるものではなかった。内藤氏もイデオロギーの再生産に関わる我々読者の問題でもあることを繰り返し強調していた。ただ、そのために〈作者〉の問題が宙に浮き、内藤氏が二段構えで行おうとしたことが、うまく伝わらなかつた嫌いがある。「整理するとそうかもしれないけれども、何かちがうんだなあ」というのが大方の正直な感想だったのでないか。

小平麻衣子氏の「書き手と作家の境界―若き女性の教養誌『新女苑』をめぐって―」は、女性に「作者」的教養を求めながら、プロの「書き手」すなわち「作家」にはさせないシステムについての考察である。この視点は魅力的である。この二律背反的な文化システムを支えていた一つのメディアとして、『新女苑』が検討されているが、この他にも、昭和一〇年代前半のあらゆる教養をめぐる言説が射程に入っている。一個の発表として最もまとまっている分、企画テーマから最も遠いとも考えられ、そのせいか、質疑も少なかった。もったいないと思う。

田口律男氏の「テクスト論者が個人学会にこだわる理由」も、タイトル通り、二律背反的なものを扱う、ややアクロバティックな発表である。作家の年譜なるものの分類と検討に、特集テ

ーマへの配慮が窺えるが、むしろこの発表の眼目は、横光利一のテクストの表現の源泉を年譜に探った結果、偶然、神原泰の詩との関連発見に至ったことの報告にある。この眼目自体は特集テーマがなくても成立したもので、「実証性のあるか」に関連づけて、そのことを田口氏は確信犯的に行ったように見えた。

最後は、仏文学者の野崎欽氏による、「作者と訳者の境界で」という発表である。翻訳者は、翻訳の際に、逐語訳的な翻訳から伝達優先の大胆な翻訳までの振り幅の中で、翻訳スタンスを選択する自由を持つ。その際、原作者は、テクストの歯止めとして機能する。翻訳者とはどのような翻訳を目指すべきなのか、という論点から、作者の意図をいったん無化した上で、その歯止めとしての機能の復権を持ち込む手つき

は実に鮮やかである。

ところで、野崎氏は日本近代文学会の会員ではないが、今回もこの「会員外」枠にかなりの質疑が集中して寄せられた。これは、ゲストを招く特集なるものの祝祭性を指示するものとも考えられよう。今回の祭は盛り上がりを見せ、概ね成功だったと評価できる。ただ、個々の発表同士の有機的連関がうまくとどれたかという疑問は残る。祭は今後も繰り返される行事であるが、そのために、儀礼的な慣習化も進む。祭の後に残された課題は、テーマの深化というより、特集という祝祭自体の運営のあり方ではなからうか。

中谷 いずみ 著

『その「民衆」とは誰なのか』

ジェンダー・階級・アイデンティティ

山口 直孝

「おわりに」によれば、衆議院議員定立やすしは、自らのサイトで日本維新の会の主張を「民衆史観」の語で説明しているらしい。非当事者の恣意による「民衆」の意味の塗り替えは、現在も続いている。中谷は、「民衆」が容易に主体となれない事情を過去に探っていく。問いかけを書名に掲げた本書は、「民衆」を取り巻く複数の力の抗争を可視化した、刺激的な表象研究である。

対象とされた時代は、東アジア太平洋戦争を挟んだ一九三〇年代と一九五〇年代。いずれにおいても、「民衆」は、まず上から規定された。三〇年代には、モダニズムやマルクス主義の立場にあった文学者たちが総力戦体制の中で孤立するのを恐れて、伝統と結びつく「民

族」や普遍的な「民衆」概念を理想視し、同化を図る動きがあった。五〇年代になると、前衛政党の混乱に対する不信感などから、特定の組織に率いられない無色な「大衆」への期待が高まるようになる。

厄介なのは、他の社会集団のまなざしに応えるかのように、「民衆」がふるまうことである。綴り方運動によつて言葉を獲得し、苛酷な境遇を文章化した労働者階級は、一方で訴えのために自身を単純化して描いたり、無力さを強調したりする傾向から自由ではなかった。中でも女性や子どもは、「愛」・「涙」・「純白」などの属性を付与され、弱い存在として周縁化される。作文の定型が人々に力を与えつつ、表現者を

拘束する装置としても機能してしまう事態を、中谷は周到な分析で浮かび上がらせる。

島木健作・火野葦平・太宰治ら職業作家の仕事と無名の書き手の営為とを並行させて論じた取り組みは、新しい史的記述の可能性を拓くものであろう。「素朴さ」を持った「民衆」像が温存された事実は、「戦後文学」というとらえ方の限界を突きつける。豊田正子が素人のよそおいをまといつつ、職業作家になっていく過程は、近代日本のねじれを集約的に表しているよう。

「その「民衆」とは誰なのか」という問いかけは、匿名性に埋没してしまいがちな「民衆」にも向けられている。文学者と「民衆」との共依存によつて戦争責任がいかにか回避されたかは、本書の空白が提示する魅力ある課題である。多数者が複数性を排除せずに多数者でありうる道筋を模索する中谷の、次なる仕事が期待される。

(二〇一三年七月一二日 青弓社)

三三三頁 三〇〇〇円＋税)

鳥井正晴・宮園美佳・荒井真理亜 編

『道草』論集 健三のいた風景

森本 隆子

本書は、同じく鳥井正晴氏が主な編集者となつて二〇〇七年に刊行された『明暗』論集 清子のいる風景』に次ぐ、漱石論集の第二弾である。今回は執筆陣に言語学研究者を加え、巻末には同時代から現代までの一〇〇〇年に及ぶ『道草』研究史（荒井真理亜、吉川仁子、宮園美佳各氏）と詳細な研究文献目録（村田好哉氏）を付して、いよいよ充実感に満ちた一書となっている。

『道草』研究の焦点の一つは（過去と現在）をめぐる時間意識の問題にあり、最近の大きな収穫として野網摩利子氏の『夏目漱石の時間の創出』は記憶に新しいが、雑駁の弊を顧みず、限られた紙数

で私見を要約するならば、本書の最大の魅力は、一四本の論考がそれぞれ独立的に完結しながら、同時に連なりあつて緩やかなルーブを形成し、過去の衝迫が健三の（現在）を突き崩し、表皮を剥がされた健三が忌避し続けてきた関係性の磁場へと否応なく引きずり出されてゆく様相を生々しく浮かび上がらせてゆく点にある。

「欠落」感に満ちた「否定表現」（木村澄子氏）の多用が主人公を追いつめていった先に見えてくるのは、「帽子を被らない男」という侮蔑的な「換喩」（岸元次子氏）で示される養父と「分らない自己」（小橋孝子氏）との一種、鏡像的な関係であり、

炙り出されてくるのは、「頼み」とする「論理」（吉川仁子氏）や「理」の力（山本欣司氏）に自縄自縛されながら、「老い」（上總朋子氏）、「世俗」の中に在ることを免れず（田中邦夫氏）、優越を誇つてきた学歴の「始原」の位置に島田の記憶を見出さざるをえない（宮園美佳氏）健三の（現在）、ひいては背後にあつて健三を縛つている「金銭至上主義」（木谷真紀子氏）や「裁縫する女」像（北川扶生子氏）といった明治の家族イデオロギーである。

「表現する行為」（長島裕子氏）の意味が問われ、その把握しきれぬ生々しい感触を「名付けられないもの」と呼び（笹田和子氏）、「神の眼」に論じ及んだ（鳥井正晴氏）ところで、論集は、冒頭部の「書く」意識を問うた「書き潰し原稿」の問題提起（佐藤栄作氏）とはるかに交響し合つて、見事に環を閉じるのである。

（二〇一三年九月三〇日 和泉書院

四九二頁 七五〇〇円＋税）

会議の記録（二〇一三年度）

四月二〇日（土）

運営委員会。運営委員顔合わせ、各担当委員の決定、会計報告・予算について、二〇一三年度春季大会のスケジュール確認と当日の分担、二〇一三年度秋季全国大会について（プログラム確認、関西支部特別企画の趣旨文作成、登壇者の人選および公募枠締切確認、自由研究発表の関西支部枠、大会名称の確認）、運営委員の交通費補助について、連続企画の出版について、関西支部の今後の企画等について、年間スケジュールの確認、春季大会案内および「会報」第一七号発送作業。（奈良教育大学）

六月一日（土）

運営委員会。春季大会および総会について（スケジュールと分担の確認、総会の議題、議長団の人選、会計報告・

予算案）、秋季全国大会について（自由研究発表の関西支部枠について、関西支部特別企画登壇者およびスケジュール確認、発表要旨等の締切確認）、春季大会登壇者の謝金について、「会報」第一八号について（書評欄への採否と執筆者の人選、編集スケジュールの確認、誌面構成について）、今後の関西支部の運営について（二〇一四年度に向けて、二〇一五年度以降の企画案について）。

総会。新運営委員紹介、二〇一二年
度事業報告、二〇一二年
度会計報告、二〇一二年
度会計監査報告、二〇一三
年度事業計画、運営委員の交通費補助
について、二〇一三年度予算案。（関西
学院大学）

七月二二日（日）

運営委員会。秋季全国大会について
（日程・プログラムの確認、大会運営
の分担について、関西支部特別企画に
ついて、関西支部主催の慰労会につい

て）、二〇一四年度支部大会について
（日程および会場校について、小特集
企画の内容について、企画WGの立ち
上げ、「会報」第一八号について（内
容確認と校正、編集スケジュールの確
認）、今後の関西支部事業について（連
続企画出版に向けて、二〇一五年度以
降の方針について）。（奈良教育大学）

八月下旬～九月下旬

二〇一四年度春季および秋季大会小
特集企画WG、メール会議。

八月二八日（水）

二〇一四年度秋季大会小特集企画WG
ミーティング。（京都教育大学）

九月二八日（土）

運営委員会。秋季全国大会について
（プログラム変更について、自由研究
発表の確認および各会場係の決定、関
西支部特別企画の確認、支部会報およ
び本部会報印象記執筆者の人選、大会
運営の役割分担）、臨時総会の開催につ

いて、連続企画出版に向けた編集作業について、二〇一四年度春季大会について（小特集企画趣旨文作成、登壇者の人選、タイムテーブルの確認）、二〇一四年度秋季大会について（趣旨文および方針の検討）、秋季全国大会前後のスケジュール確認。（奈良教育大学）

一〇月二二日（土）

二〇一四年度春季大会小特集企画WGミーティング。（大阪経済大学）

一〇月二六日（土）

運営委員会。秋季全国大会について（スケジュールおよび分担の確認）、臨時総会議題および説明内容等について、関西支部特別検討委員会の開催について、二〇一四年度春季大会について（趣旨文および登壇者の検討）、二〇一四年度秋季大会について（企画方針の検討）、「会報」第一九号の書評欄への採否と執筆者の人選、新運営委員長および新運営委員の人選について。（関西大学）

一〇月二七日（日）

臨時総会。関西支部会則の一部改定について。（関西大学）

一二月二四日（日）

二〇一四年度秋季大会小特集企画WGミーティング。（京都教育大学）

一二月一五日（日）

特別検討委員会。秋季全国大会について（経過説明、会場校からのまとめ、関西支部運営委員の大会運営参画について、関西支部大会を「合同開催」とした点について、関西支部会員の登壇状況について、関西支部特別企画について）、関西支部主催「慰労会」について、「支部長懇談会」の開催および今後の学会本部の各支部との連携について、今後の関西支部運営について（関西支部事業について、関西支部「会報」について、その他の支部事業について、関西支部運営体制について）、関西支部より学会本部への提案について。（西宮

市甲東センター）

一二月二二日（日）

運営委員会。特別検討委員会の報告、二〇一四年度春季大会について（内容確認、司会の人選、登壇者およびタイムテーブルの確認、公募枠のHPでのアナウンスについて）、二〇一四年度秋季大会について（趣旨文および企画方針の再検討）、連続企画の出版について（春季大会登壇者の入稿状況について、秋季大会発表の論文化について、スケジュールの確認）、「会報」第一九号について（誌面構成およびスケジュールの確認）、関西支部出版事業の問題について、新年度運営体制について（新運営委員長の決定、新運営委員の人選）。（奈良教育大学）

二月三日（日）

二〇一四年度秋季大会小特集企画WGミーティング。（京都教育大学）

三月二日(日)

運営委員会。二〇一四年度春季大会
について(自由研究発表応募者の審査、
小特集発表要旨の確認、小特集公募枠
審査、タイムテーブル確認)、二〇一四
年度秋季大会について(会場および日
程について、企画趣旨文および方針の
再検討)、「会報」第一九号の編集作業
と校正、新年度運営体制について(新
運営委員の人選、事務局の引き継ぎに
ついて)。(奈良教育大学)

三月二三日(日)

運営委員会。新規運営委員の紹介、
二〇一四年度年間スケジュールの確認、
運営委員各担当の決定と引き継ぎ、二
〇一四年度秋季大会について(趣旨文
の再検討、登壇候補者の人選)、「会報」
第一九号編集作業、会計報告・予算に
ついて。(奈良大学)

◆関西支部会則の一部改定について

二〇一三年一〇月二七日の臨時総会
において、関西支部会則の一部が改定
されました。(線部、改定箇所)

第五条(役員)

五、役員
の任期を次のように定める。
1 役員
の任期は二年とし、再任を妨げ
ない。ただし連続して三期の選出は認め
ない。

2 支部長
については、再任の場合はその
任期を一年とし、連続して四期の選出
は認めない。ただし、選任以前の役員任
期を支部長任期に算入しない。

附則

二〇一三(平成二十五)年十月二十七
日の大会で改正承認

二〇一三年度役員

支部長 大橋毅彦
運営委員長 日高佳紀
運営委員 天野知幸 越前谷宏
岡村知子 小川直美
金岡直子 木田隆文
須田千里 関 肇
高木彬 高橋幸平
長沼光彦 長原しのぶ
永渕朋枝 西山康一
信時哲郎 山崎正純
山田哲久 山本欣司
渡部麻実 渡邊ルリ
和田崇

二〇一四年度関西支部秋季大会 研究発表募集のお知らせ

日本近代文学会関西支部では、二〇一四年度秋季大会での自由研究発表を募集いたします。
支部会員の皆さまの積極的な応募をお待ち申し上げます。

日時会場 二〇一四年十一月一日（土） 京都教育大学

募集人数 二〜三名

応募締切 二〇一四年七月一八日（金） 必着

応募要領 発表題目および六〇〇字程度の要旨を封書でお送りください。必ず連絡先（電話番号・メールアドレス等）も明記してください。

○発表時間は三〇分程度です。

○採否については、運営委員会で決定次第お知らせいたします。

発表に関してご不明の点は事務局までおたずねください。

送付先 〒631-8502 奈良市山陵町一五〇〇 奈良大学 木田隆文研究室内 日本近代文学会関西支部事務局

◎小特集企画について

教室のなかの〈作家／作者〉（仮）

二〇一四年度秋季大会では、自由研究発表のほかに小特集企画を行います。こちらは二〇一三年度から始まった連続企画「文学研究における〈作家／作者〉とは何か」（全四回）の第四回にあたる特集です。

企画の趣旨および登壇者の発表要旨等の詳細は関西支部HPに掲載いたします。

事務局便り

○関西支部事務局の変更について

運営委員長の交代に伴い、二〇一四年度より関西支部事務局が奈良大学へと変更になりました。不慣れなため、至らぬ点が多々あると思いますが、よろしくお力添えいただければ幸いです。なお、入退会のご連絡、発表の応募、献本の送付先等も変更となりますので、ご留意いただきますようお願い申し上げます。

○献本のお願ひ

本会報では、支部会員の皆様が刊行された書籍を対象に、書評欄を設置いたしました。事務局では、書評を希望される書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

●対象となる書籍：支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍。

●送付先：関西支部事務局

※なお、書評欄への掲載の採否および書評者の人選については、関西支部運営委員会にご一任ください。

○維持会費納入のお願ひ

維持会費の納入がたいへん少ない状況です。ご協力のほど、何卒よろしくお願ひします。

○関西支部二〇一四年度運営委員（※〇：新規委員）

○天野勝重 天野知幸 岡村知子 小川直美 金岡直子 木田隆文（委員長） ○坂堅太 ○重松恵美 須田千里

関肇 高木彬 高橋幸平 ○戸塚麻子 長原しのぶ 西山康一 信時哲郎 ○ホルカ・イリナ ○前田貞昭 山崎正純

山田哲久 山本欣司 和田崇

○日本近代文学会関西支部事務局

〒631-8502 奈良市山陵町一五〇〇 奈良大学 木田隆文研究室内